

信州大学留学生センターにおける日本語教育実習報告

門脇恵利子¹

1. はじめに

留学生センターでの日本語教育実習は、これまで学習してきた日本語教育学の理論が日本語教育の現場で実際にどのように生かされているかを体験的に学習する機会であった。今回実習先として参加させていただいたのが教室外活動（プロジェクトワーク）のクラスであったため、学習者が学習した四技能をどのように使ってタスクを遂行していくかの過程を見ることができた。これらの経験から、プロジェクトワークが学習者にもたらした成果と、実習生としての経験から私自身が得たことについて述べていく。

2. 留学生センター実習を通して

2.1 プロジェクトワーク

今回実習で参加させていただいた教室外活動は「プロジェクトワーク」と呼ばれている教授法にあたる。プロジェクトワークは次のような活動である。

「グループごとに設定されたプロジェクトを実施する準備として、おのおのの分担を決めて調査・情報収集・計画の立案を行い、それを報告書にまとめて口頭あるいは文書で発表する練習。文献を読んだり、口頭で調査したり、資料を分析したり、報告を書いたり、それを発表する過程で目標言語を使う経験を積み、実践的なコミュニケーション能力を向上させることができる。」
（『はじめての日本語教育[基本用語辞典]』高見澤孟執筆 33頁）

2003 年度前期の信州大学留学生センターでは、大きく分けて以下の9つの活動が行われた。活動の詳しい内容については2.2で述べることにする。

- (1) 買い物タスク
- (2) 松本街歩き
- (3) 日本文化体験(書道、茶道、邦楽)
- (4) 日本人と話そうプロジェクト

¹ 信州大学人文学部文化コミュニケーション学科 日本語教育学専攻 4年生。

- (5) 蛍祭り計画
- (6) おしゃべりパーティー
- (7) インタビュープロジェクト
- (8) 書中見舞い作成
- (9) 文集プロジェクト

留学生センターは初級、中級クラスで構成されているが、プロジェクトワークは初級レベル、中級レベル合同で行われている活動である。初級レベル(4名)を履修していた中国出身の学習者が2名、ベラルーシ、ネパール出身の学習者がそれぞれ1名ずつ、中級レベル(3名)を履修していたドイツ、ルーマニア、中国出身の学習者が1名ずつ、合わせて7名の合同クラスであった。全体としてクラスの半分が漢字圏からの留学生である。

2. 2 コース・デザイン

プロジェクトワークは上述した(1)から(9)の順序で行われた。活動の順序は学習者がタスクを遂行する上で必要な技能、レベルが段階的に難しくなるようにデザインされていた。それぞれの活動内容と必要とされる技能について以下に詳しく述べていく。

ここでは学習者がどのような順序で最終的なプロジェクトワークの目標である「実践的なコミュニケーション能力の向上」を果たして行くかを活動を追いながら見て行く。

第1回の活動「買い物タスク」では予めそれぞれの学習者を買ってきてもらうものを指示し、それを各自紙にメモを取らせた。この時初級学習者には品物(文字を読むことが出来れば商品を買える)、中級学習者にはチケットや本の注文(職員との会話が必要となる)というようにレベルに合わせた指示を行った。この時点ではセンターでの学習が始まってわずか一週間しか経っていなかったため、説明や配布物は日本語と英語が同じくらいの割合で使われた。買い物は学内の生協で行い、学習者の様子は教師が側にいて見守った。

第2回の活動「松本街歩き」はフィールドが学外と広がった。内容的には第1回を踏襲していたが学習者が行う調査対象が学外に移り、生活場面と関りの深い調査がタスクに盛り込まれた。プロジェクトワークの特徴である調査・情報収集・計画の立案という部分については教師側が事前に調査等を行い、学習者にも遂行可能なタスクを準備した。ここまでは四技能のうちでも特に聞く、読むを中心にタスクを遂行する事が多く、教師側からの指示や活動の説明を行う際にも英語と日本語の両方で行われることが多かった。

第3回、第4回の「日本文化体験(書道、茶道、邦楽)」では書く、聞く、を中心に活動が組まれた。学習者に実際に体験してもらい、日本の伝統文化を理解し

てもらおうと、日常生活ではほとんど触れることのない活動に触れる機会が設けられた。茶道、邦楽に関しては学外から先生を招き、指導をいただいた。

第5回の「日本人と話そうプロジェクト」で自己紹介やディスカッションを通して、話す技能もタスク達成に大きく関わるようになる。またこのころから計画の立案などにも学習者が関わってくる。教師はディスカッションのテーマにどのようなものを扱うか、自己紹介では何を紹介するか、などを学習者に考えさせる役割を担った。ここまでの活動に関しては、フィードバックを通してタスク遂行に比較的盛り込まれることの少なかった書く技能についてフォローが行われており、四技能に偏りをつくらない工夫がなされていた。

学習者自身が調査、情報収集、計画の立案をし、それらを実行に移し発表するという本来のプロジェクトワークの形をとるようになったのは、第7回の「蛍祭り計画」からである。この活動は蛍祭りの行われる会場までの行き方や時間を、開催しているところへ電話やインターネット、時刻表等を使って学習者自ら調査、情報収集させるところから活動が始まった。しかし蛍祭りそのものへの参加に関しては授業時間外ということもあり自由参加であった。また祭りへの「日本人と話そうプロジェクト」に参加していた日本人学生にも声をかけ、授業時間外での学習者と交流も行われた。

「蛍祭り計画」以降の「おしゃべりパーティー」「インタビュープロジェクト」では完全に学習者主体の活動といえるようになり、教師の役割はタスク遂行までの過程を見守るものに移行していった。さらにこのころには活動の説明で英語が使われることも少なくなってきた。学習者同士もそれぞれの得意な分野、苦手な分野をお互いに認識するようになり、役割分担をする場合にもそれに関して助け合う様子が見られるようになる。タスク遂行のための活動時間外の準備なども各自で考えて進められるようになった。これはプロジェクトワークのまとめとして行われた「文集作成プロジェクト」にその様子がよく見られた。この活動は夏休みを一ヶ月挟んで行われた活動であったが、休み中に作文をある程度まとめておくことになっていた。全てがそろわない学習者もいたが、用意できていないものに関しては、多少教師の指示もあったものの学習者同士でいつまでに用意して編集者に渡すなどの打ち合わせが出来るようになった。

3. 実習に参加して得たこと

今回の実習では半年間を通して継続的に学習者の様子を見ることができ、プロジェクトワークが学習者にもたらした成果や、それによる学習者の変化の様子も知ることができた。ここでは第7回教室外活動の「蛍祭り計画」を取り上げ、実習から得た授業を進めていく側の準備の仕方、活動、成果などについて以下に述

べていく。

3. 1 準備

プロジェクトワークは普通の授業よりもさらに、学習者主体の活動である。ある一つのことを行なおうとした時それに対するアプローチの仕方は幾通りも存在する。留学生センターで学習する学習者は母国で一通りの学習を終えている人がほとんどであり、また専門についてはかなりの知識を有しているといえる。このため教師側は学習者に対して準備する情報の選択の幅を広く持たなければいけないことを感じた。つまりタスクを遂行するために学習者がとる自律的な選択を援助できるだけの情報を教師側が知っておく必要があるということである。教師側は準備の段階で計画・立案・実行・結果の全ての過程について把握しておくことが前提となる。それによって限られている活動時間を有効に使うことができ、適切なアドバイスをを行うこともできる。

今回の準備は佐藤先生、青柳先生によって行なわれていたが、「自分ならどうするか」を常に考えるように指導をいただいていた。実習に参加する以前では学習者の反応や動きなどもすべて想像でしか考えることができなかつたため、ここで準備として考える情報にも偏りがあつたように思う。しかし実習を通して、あくまで学習者の選択を援助するための準備をしなければいけないということに気が付いた。さらに今回は提示した情報に反応する学習者それぞれの動きについて見ることができ、学習者のレディネスについて事前に知っておく重要性も体験として学ぶことができた。レディネスの把握はコース・デザインにも関わる重要な問題である。「蛍祭り計画」の場合、計画の実行は自由参加ということであつた。これは活動が授業時間外の夜になること、このため小さい子供を持つ学習者には参加が難しいというような学習者の家庭事情等が配慮されてのことであると考えられる。また活動に対して授業外で準備する時間をどれだけとれるか、その時間によって活動内容にも差が出てくる。レディネスを把握することは効果的な活動をするための必須条件と言えるだろう。

3. 2 活動

プロジェクトワークは普段違うクラスで学習する二つのレベルの学習者が一緒に活動する機会になる。はじめはお互いに慣れないこともあつてか、話し合いなどもなかなかスムーズに行かず計画の進行に先生方の補助が入ることが多かつた。しかし活動も後半に入ってくると、それぞれがお互いの得意とするところや苦手とするところを補い合つて、わからない場合にも学習者同士で助け合う様子が見られるようになった。また、英語での補助説明も英文で行なわれていたものが、徐々に英単語を部分的に挟むように変化するなど、全体として日本語のみの解説

に移行していった。そして日本語能力の向上とともに学習者の活動に対しての主体的な動きも目立つようになってきた。「蛍祭り計画」の場合、すでに自分のタスク、現地までの行き方を地図で確認するという作業を終えた後にも別のルートを探すなどという様子が見られるようになった。このような行動が見られることから教師側の準備の重要性が示される。

活動の中には信州大学の日本語教育学専攻の学生と話をする機会も設けられており、それによって学習者と日本人学生の個人間の交流も行なわれるようになった。日本人学生を招いての活動を通して、センターで学んでいる学習者が日本人学生と話をする機会が普段の生活のなかでいかに少ないかということに改めて感じた。私は実習生としてこの活動に参加させていただいていたが、学習者側から見れば学生よりも先生に近くなるため日本人学生としては見てもらいにくい。しかし日本人学生と学習者との関係を築く手助けは、教師という立場である場合よりもしやすかったのではないかと考えている。また学習者と関わる上で私自身受身的な部分があったことも認めなければならない。学習者に対する注意など先生方が行われる前に、実習生だからこそできるものもあった。学習者主体の活動であるからこそ、それを支援する。この実習は私自身の「支援」の意味を考え直す機会となった。学習者が教師に求めるものと、教師が教師ゆえに与えなければならないものを考えさせられた。

3. 3 成果

まず学習者側の成果としては、実際に主体的に動き、計画を遂行することで実践的なコミュニケーションの方法を経験を通して学ぶことができた。始めは活動に消極的な学習者も回を重ねることで他の学習者との関係も築いていき、それによって積極的な姿勢も見られるようになってきた。これは教師の介入が回を追うごとに減ったことにつながっていくと考える。最終的にはそれぞれの学習者が出身国で学習してきたことを活かし、日本語でタスクを遂行できるようになったと考える。

ニーズ分析を行うことで学習者の目的にあわせたシラバスを作ることが出来る、また常に変化する可能性をもつ学習者のニーズの変化に応じた対応が求められそのために活動の事前・事後のミーティングが重要な意味を持つことを実感する事ができた。実習生としてこの活動に参加させていただけたことは、私にとってはレディネスとコース・デザインの関係を中心に、理論がどのように実際の日本語指導に生かされているかを見たいへん貴重な体験となった。

今回は半年を通して参加させていただいたが、私自身の力不足のためコース・デザインの測定と評価がどのように行われているかにまで関わる事が出来なかった。これに関しては、せめて実習に参加する前に前年度の活動内容などでの自

身の学習が必要だったと思っている。また先生でもなく学生でもない実習生としての立場に戸惑いもあり、初めのうちは主体的に実習に参加することさえできていなかったように思う。この原因は学習者との年齢差(学習者のほうが年上)による戸惑いが大きかったと思っていた。しかし今では自分自身の事前準備においての不足も大きかったといえる。この部分は大きな反省点として残る。

先生方の様子からは学習者主体のプロジェクトワークのような活動に関して、実際に学習者と関わることで教師側がどんなに綿密な計画を立てても、必ずしもそれをその通りに遂行することが正しいとはいえないことを学んだ。教師には状況に応じたすばやい対応と学習者に対する適切なアドバイス、さらに常にカリキュラムに対する検討が求められている。それは今回の実習中常に「自分なら」と授業の組み立てを考えながら行動するように指導を受けたことから気付いたことである。

4. 日本語教育実習共通授業

2003年度の日本語教育実習は年少者日本語教育実習、留学生センター教育実習の2つのコースから選択しての実習になった。これらの共通授業として留学生センターの上條厚先生による共通教育センターの授業見学をさせていただいた。この授業は予備教育を終えた留学生を対象に行なわれるため、日本人学生が普段授業を見る機会はない。大学予備教育では日本語の四技能についての習得が中心となるが、ここではそれらを終えた留学生が共通教育課程として日本語の表現、日本の文化や歴史について学習するための授業を見学させていただいた。日本人向けに作成されたテレビ番組を授業で使う場合には映像はそのまま使っても解説は改めて行うなど、ここでは教材としてのビデオ映像や写真の使い方を実際の授業の進行を通して学ぶことが出来た。

5. 終わりに

留学生センターでの半年間の実習、共通教育課程の授業見学は私にとって本当に貴重な体験となることばかりであった。授業を見学するだけでは知りえなかった教師の感情、思ったことを実際に行動してみる難しさなどを感じた。反省点と課題が多く残った実習であったがこれらを活かして次につなげていきたいと思う。

【謝辞】

最後になりましたが、熱心な指導と機会を与えてくださった沖裕子先生、実習生として受け入れてくださり様々な指導をしてくださいました佐藤友則先生、上條厚先生、青柳にし紀先生をはじめとする留学生センターの先生方、私のつたない指導にも一生懸命に耳を傾けてくださった学習者の皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

【参考文献】

- 田中幸子・猪崎保子・工藤節子(1998)『コミュニケーション重視の学習活動 I プロジェクトワーク』凡人社
J. V. ネウストプニー(1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

【参考資料】

- 高見澤孟・伊藤博文 他 監修(1997)『はじめての日本語教育[基本用語辞典]』アルク